

## 松坡先生と鎌倉の寺社

松坡文庫研究会 代表 袴田 潤一

### 本講演の概要

- A. 松坡田辺新之助
- B. 松坡先生と鎌倉
  - ① 鎌倉移居以前
  - ② 鎌倉への移居
  - ③ 鎌倉への移居前後の松坡先生と鎌倉の寺社
  - ④ 鎌倉同人会（大正四 1915 年発足）等による交友の広がり
- C. 松坡先生と鎌倉の寺社
  - ① 寿福寺
  - ② 妙本寺
  - ③ 鶴岡八幡宮
  - ④ その他

### A. 松坡田辺新之助

文久二年一月八日 1862.2.6～昭和十九 1944 年二月二十四日

田辺松坡、名は正守、字は子慎、称は新、新之助、別号に菱花山人。肥前唐津の人。唐津藩士の次男として江戸に生まれ、維新後唐津に戻る。山田忠蔵の廓然堂で和漢学を学び、唐津藩耐恒寮に赴任してきた高橋是清に私的に英語の手ほどきを受けた。唐津伝習所、唐津準中学校に学んだ後上京し、東京大学予備門で普通学を修める。明治十五（1882）年、高橋是清の推輓で共立学校（後の東京開成中学校）の英語・地理教授となり、明治二十（1897）年から校長を務める。開成中学校校長在職中の三十六（1903）年、逗子に第二開成学校（現在の逗子開成中学校・高等学校）を、翌年鎌倉に鎌倉女学校（現在の鎌倉女学院中学校・高等学校）を設立し校長となり、逗子開成は大正二（1913）年まで、鎌倉女学校（鎌倉高等女学校）は昭和九（1934）年までその職にあった。教育における業績は高く評価されている。

一方、上京後、岡本黄石・大沼枕山に漢詩を学び、明治十七（1984）年から晩翠吟社に参加。「松坡」の号はこの頃、同郷の師である中澤見作より与えられた。『日本名家詩選』（脇屋義質編 須原屋茂兵衛 明治十九年）に作品が採録されたことで、二十代半ばで漢詩壇に颯爽とデビューし、晩翠吟社では幹事として杉浦梅潭を助け、向山黄村没後は批正も担当し、明治三十（1897）年からは『毎日新聞』詩壇（漢詩）の撰者を務めた。また、杉浦梅潭、樺山資紀の詩集を編むなど、明治・大正・昭和の詩壇で活躍した。各地の多くの碑・墓誌の撰文なども手掛けている。『小笠原耆岐守長行』の編纂委員でもあった。

明治三十七、三十八年頃、鎌倉に居を移し、亡くなるまで鎌倉に住んだが、鎌倉同人会設立（「同人会」の命名、設立趣意書の起草）に関わり、鎌倉市内にある旧蹟保存指導標の撰文にも携わった。また、市内で漢詩の講読会を開き、自ら漢詩会（松社）を主宰し、鎌倉の文化人・

政治家・財界人・軍人などとの交流を通じて、清雅な都市鎌倉の文化的発展に大きく貢献した。間島弟彦との親交から、間島の没後、鎌倉図書館建設を記念して建てられた「間島君旌徳碑」(旧図書館、現「おなり子どもの家こぼと」脇)の撰文に当たった。

昭和十九(1944)年二月二十四日、肺炎により死去。享年八十三。杏庵松坡居士。墓所は鎌倉寿福寺。

戦後、ご遺族より漢籍を中心とした膨大な旧蔵書が鎌倉市図書館に寄贈され、今日「松坡文庫」と呼ばれている。

配、水谷氏鏝(慶応元年十二月三日 1866.1.19～昭和十六 1941年十一月十五日)との間に三男四女。長男元は文化勲章受章の哲学者、次男至は黒田清輝門下の西洋画家。孫に田辺穰(画家)、野沢謙(農学者)、野沢協(フランス文学者)、曾孫に田辺匠(建築家)、野沢尚(作家・脚本家)がいる。



田辺新之助 昭和九(1934)年  
鎌倉高等女学校校長 退職記念の組写真の一枚

## B. 松坡先生と鎌倉

### ① 鎌倉移居以前

鎌倉妙本寺	鎌倉妙本寺
老木千章森刺天	老木千章 森として天を刺す
不聞人語只鳴蟬	人語を聞かず 只だ蟬の鳴くのみにみ
山門岑寂通危磴	山門は岑寂として危磴に通じ
雲白苔青六百年	雲白く 苔青く 六百年

『太陽』第四卷第十一号 博文館 明治三十一(1898)年五月二十日)

### ② 鎌倉への移居

a. 『新文學』(第五卷第五号 明治四十三(1910)年一月) 所載の「新年雜詠」詩の第七句に「湘南五度新迎歲(湘南、五度新たに歳を迎う)」とあり、松坡の鎌倉への移居は明治三十八(1905)年のことだと推察される。

※ 鎌倉女学校創設の翌年、明治三十八(1905)年。

※ 松坡の二女横地秀の証言(古田中正次『鎌倉そして鎌女』1981 p.57)に拠れば、移居の時期は明治三十七(1904)年四月か？

※ 最初の住まいは小町(もとまちユニオン付近?)

その後、小町(12a 鎌倉西側)、扇ヶ谷(寿福寺付近)、原ノ台、和田塚、乱橋などに住み、長く借家住まい

### ③ 鎌倉への移居前後の松坡先生と鎌倉の寺社

a. 片野玄貞(日蓮宗僧侶)との交友

池上中檀林、雙榎大檀林で修学

明治三十七(1904)年、鎌倉に来て藤原日迦(妙本寺・龍口寺)のもとで修行

晃陽と号して漢詩をよくしたが、松坡の知友である岸上質軒・上村賣劍とは明治

三十八(1905)年頃には親交があった

田辺松坡に詩の教えを受ける

晃陽片野玄貞に「訪松坡先生賦呈(松坡先生を訪うて、賦し呈す)」という詩有り(明治三十九(1906)年)

b. 片野玄貞との交友を通じて、松坡は日蓮宗僧侶(島田日雅など)及び日蓮宗寺院との関係を深めていったと思われる

### ④ 釈宗演(円覚寺・建長寺・東慶寺)との交友

a. 角田翁頌徳碑(鎌倉市玉繩小学校内) 大正三(1914)年十二月

篆額・撰文 釋宗演

書

松坡田辺新之助

### ⑤ 鎌倉同人会(大正四(1915)年発足)等による交友の広がり

内田智光(寿福寺)、菅原時保(建長寺)、菅原東丘(報国寺)、国立正呉(建長寺)など

## C. 松坡先生と鎌倉の寺社

### ① 寿福寺

a. 鎌倉市扇ヶ谷にある臨済宗建長寺派の寺。亀谷山寿福金剛禅寺。本尊は釈迦三尊。鎌倉五山の第三位。この寺はもと源義朝の邸宅であったが、その没後岡崎四郎義実がこの地に亀谷堂を建て、正治二（1200）年、北条政子が栄西を開山として伽藍を建立したのに始まる。建保三（1215）年、栄西が没すると門弟退耕行勇が住持し、この寺は日本の初期の禅宗史上で重要な地位を占めることになった。中世にはたびたび兵火に見舞われ、足利氏の衰退と共に荒廃が進んだ。嘗ては正隆庵、悟本庵、松鶴庵、桂光庵、大沢庵、定光庵などや、乾徳寺などの塔頭があったが、いまは山門、中門、仏殿、客殿、庫裡を残すのみである。寺宝の木造地藏菩薩立像、紙本墨書『喫茶養生記』は国重要文化財。本尊の釈迦像（県文化財）は唐の陳和卿の作と伝えられ、籠で上を張つてあるところから籠釈迦という。境内は国史跡。なお、背後の山麓には源実朝、北条政子の墓と伝える五輪塔を納めたやぐらがある。

### b. 松社の月例会

禪房清集 分韻

壽福禪關竹樹扉

黄鶯聲滑與春宜

半簾紅雨花香碎

一塔青嵐晷影移

當日開山傳茗種

如今居士撚霜髭

雲龕隔斷軟塵地

題壁貫珠長短詩

禪房清集 分韻

壽福禪関 竹樹の扉

黄鶯の声滑らかに 春と宜し

半簾の紅雨 花香碎け

一塔の青嵐 晷影（キエイ）移る

当日の開山 茗種を伝え

今日の居士 霜髭を撚る

雲龕 隔て断つ 軟塵の地

題壁の貫珠 長短の詩

『漢詩春秋』第十九卷第五号 昭和十（1935）年五月一日

松坡が主宰する松社の月例会の折の作

白い髭を撚っている当今の居士Ⅱ内田智光師

この詩が書かれた軸が寿福寺にある

「乙亥春晚禪房清集分韻作録似壽福寺上人」との為書きがあり、乙亥年、昭和十年三月の詩会の折に詠じられ、内田智光師に贈られたものだと思われる

### c. 松坡による漢詩講義

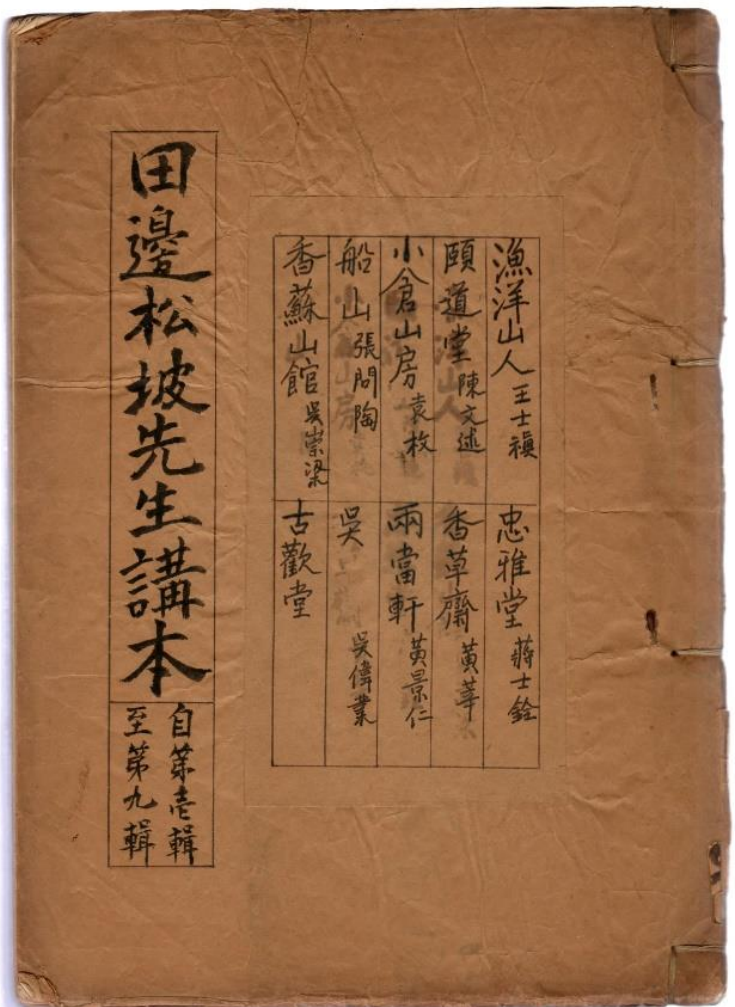
昭和十一（1936）年頃、建長寺正統院の國立正呉が内田智光に漢詩の勉強をしないかと提案し、松坡に指導を依頼

松坡が会の名を「晚翠会」とした 会員は十名ばかり

始めは即題（その場で題を与えられて漢詩を作る）だったが、『清詩評注読本』の講義を行うようになった

教材は『田邊松坡先生講本』

松坡の高齡化（七十九歳）により昭和十五（1940）年頃に終了



『田邊松坡先生講本』  
(個人蔵)

d. 内田智光の漢詩

寿福寺総門脇「源実朝をしのぶ」碑 (鎌倉同人会 1992) 碑陰

同人會讚實朝情 同人会 実朝の情を讃え  
 建碑門頭唱至誠 門頭に碑を建て 至誠を唱う  
 海波毫趣呈推敲 海波の毫(ノ豪)趣 推敲を呈(シメ アラワ)し  
 春秋八百笑相迎 春秋八百 笑いて相迎う  
 亀谷山壽福寺閑栖智光題

※ 転句

大海の磯もとどろによする波 われてくだけてさけて散るかも (源実朝)

※ 結句

碑は実朝生誕八百年を記念して建てられた

e. 三千、松坡、鏝の墓

大正元 (1912) 年八月十一日、長男泰二を出産した直後に早世した、松坡・鏝の  
 長女三千 (石井氏) の墓がある 「貞静院釋尼證道信女」  
 泰二は松坡夫妻が引き取って養育した

田辺家之墓

鏝 松室妙鏝大姉 昭和十六年十二月十五日  
 松坡 杏庵松坡居士 昭和十九年二月二十四日

② 妙本寺

a. 鎌倉市大町比企ヶ谷にある日蓮宗妙本寺派本山。山号は長興山。本尊は三宝祖師。開山は日朗。文応元(1260)年、比企能本の草創と伝えられるが、一説には文永十一(1274)年、比企氏が日蓮に私邸を喜捨したのが始まりという。応永二十九(1422)年、佐竹入道常元(山入興義)が寺にこもり足利持氏に攻められた際に当寺も炎上、永禄二(1559)年頃には復興されたようである(本門寺日現書状)。長尾景虎(上杉謙信)をはじめ各武将はその軍勢が寺内で狼藉することを禁じた。豊臣秀吉も同様の禁令を出している。江戸時代に徳川家康が寺領を付与し、諸堂の修復、三宝諸尊の再興、釈迦堂向拝、鐘楼などがつくられた。

b. 片野玄貞との交友 (B. ③ 参照)

c. 島田日雅(勝存 1881/82~1966)との交友

明治三十六(1903)年、田中智学の本化宗学研究大会(大阪 1903.4~1904.4)に参加 片野玄貞も参加

翌年、日蓮宗を脱し、田中智学の自活布教隊に入る

明治三十八(1905)年、日蓮宗に戻る

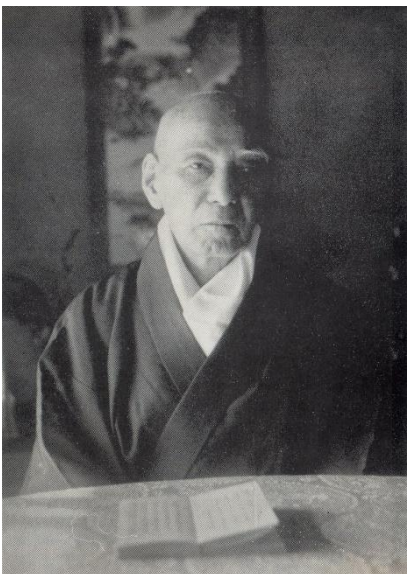
昭和二(1927)年、妙本寺(本行院)住持となり司務職(全山を統監)を兼ねる

「上人汎交ヲ喜マズ。然レドモ又石交數人有リ。片野玄貞、田村静明、井村日成、増田日光、石川日教、山田日眞、横山仁秀是ナリ。皆宗門ノ雋タリ。」

『日雅上人傳・日雅上人逸事』柳齋塚本省先生撰 昭和四十二(1968)年三月十一日増補版

日雅上人の妙本寺晋山を祝って松坡が詠んだ漢詩

東海潮音和鼓聲	東海の潮音 鼓声に和し
須期獅吼萬人驚	須く期すべし 獅吼に万人の驚くを
舌鋒磨礪降魔劍	舌鋒 磨礪す 降魔の劍
妙法鎌山第一城	妙法 鎌山 第一の城



日雅上人

『日雅上人傳・日雅上人逸事』より

日雅上人、片野玄貞、横山仁秀らが一堂に会した記録

片野玄貞（晃陽）の詩（『晃陽詩鈔』より）

詩題

「田中巴雷先生患眼受鎌倉大林國手治數十旬殆得快明將還一江一夕張宴要山香風園招田邊翁向山博士大林國手島田横山兩師及予特使兒女演國性舞蹈以助興翁賦七律一篇呈巴雷先生先生次韻辱似乃亦用原韻賦所懷」昭和三（1928）年

田中巴雷先生眼を患い、鎌倉大林國手の治を受ること数十旬にして殆ど快明を得、將に一江に還らんとす。一夕、宴を要山香風園に張り、田邊翁・向山博士・大林國手・島田横山兩師及予が招かる。特に兒女をして國性の舞蹈を演ぜしめ、以て興の助とす。翁、七律一篇を賦し巴雷先生に呈す。先生次韻し辱くも似す。乃ち亦た原韻を用いて所懷を賦す。」

d. 『鎌倉風景十二帖』（大橋康邦画、田辺松坡詩 昭和八 1933年冬 逗子開成学園蔵）

其八「比企谷」詩

林壑陰深樹掩天 林壑陰深として 樹 天を掩い

法華堂外鼓聲傳 法華堂外 鼓声伝う

幾基苔碣埋幽恨 幾基の苔碣 幽恨を埋め

蘿月松風七百年 蘿月 松風 七百年

e. 名木海棠と松坡の漢詩碑

「◎松社雅集 鎌倉比企谷妙本寺堂前には古くより一大海棠あり、年年春花錦の如く遊人絡繹するも花に關して詩歌なきを憾とし、現住東水師より松坡先生に委囑する所ありその詩碑竣成せしかば十月廿日を卜し、竣成の式を擧ぐ、松社同人は之に參すること、なり、午前十時半小雨降る中に一同碑前に參集、住持の讀經により式を畢り樹傍に於て撮影の後方丈に歸り住持より挨拶併に植樹の緣起説明、松坡翁より、詩を以ての答辭あり午齋の饗を受け、墓溪松社雅集を席題とし、分韻聯句例の如く、各自の句を箋上に寫し散會せしは四時近き頃なりき。下略」

『漢詩春秋』第二十二卷第十一号（1938.12.1）の松社同人萩原錦江の報告記事

海棠花下吟 海棠の花の下に吟ず

嫩葉穠葩綠擁紅 嫩葉（どんよう）穠葩（じょうは） 綠 紅を擁す

祇園雨霽洽光風 祇園の雨 霽（は）れて 光風洽（あまね）し

山僧說法花陰午 山僧 法を説く花陰の午

髣髴閻浮七寶宮 髣（ほのか）に現ず 閻浮七宝の宮

碑は妙本寺祖師堂手前右の植え込みの中に現存

※ 竣成式の折に詠まれた聯句

興山雨集 松坡題

林庭細雨幽意長	霞汀	林庭 細雨 幽意長なり	中島霞汀(賛)
長興山上風淒涼	松浦	長興山上 風 淒涼なり	池 松浦(幸雄)
雲樹匝古戰場	益堂	雲樹 匝古戰場	須藤益堂(謙)
鎌臺詩陣文氣揚	雲洞	鎌台の詩陣 文氣揚がり	志賀雲洞(十郎)
有文有武旌旆張	蘆江	文有り 武有り 旌旆を張る	小島蘆江(歎一)
名花名山聞八荒	鶴南	名花 名山 八荒を聞く	相羽鶴南(清次)
法統居然關一方	梅塢	法統 居然として 一方に関わり	加藤梅塢(郁二)
安國論成輝佛光	筠陵	安國論成りて仏光輝く	須藤筠陵(久蔵)
滌除玄覽老與莊	東水	玄覽を滌除するは 老と莊	島田東水(勝存)
把筆來上東公堂	錦江	筆を把り來たりて 東公堂に上る	萩原錦江(彰)
烟光嵐色充僧房	浩堂	烟光 嵐色 僧房に充つ	富岡浩堂(不詳)
文章有力難可量	蘭山	吾輩の文章 無盡蔵	中村蘭山(秀樹)
知與名字千載芳	梧窗	名字と知り 千載芳し	井上梧窓(義方)
天高人健淒似霜	琴橋	天高く 人健やかに	吉井琴橋(不詳)
墓谿山裏薰花香	妙華	墓谿山裏 花香薫る	金子妙華(光和)
鐘聲一杵松千草	洛山	鐘声一杵 松千草	原田洛山(久太郎)
龍魔長滅妙法郷	松琴	龍魔長滅す 妙法の郷	山本松琴(盛太郎)
仍想爛漫春海棠	松坡	仍りて想う 爛漫 春の海棠	田辺松坡(新之助)

戊寅十月仲浣有妙本寺海棠詩碑落成之式松社同人亦參焉

試柏梁體聯句松坡居士

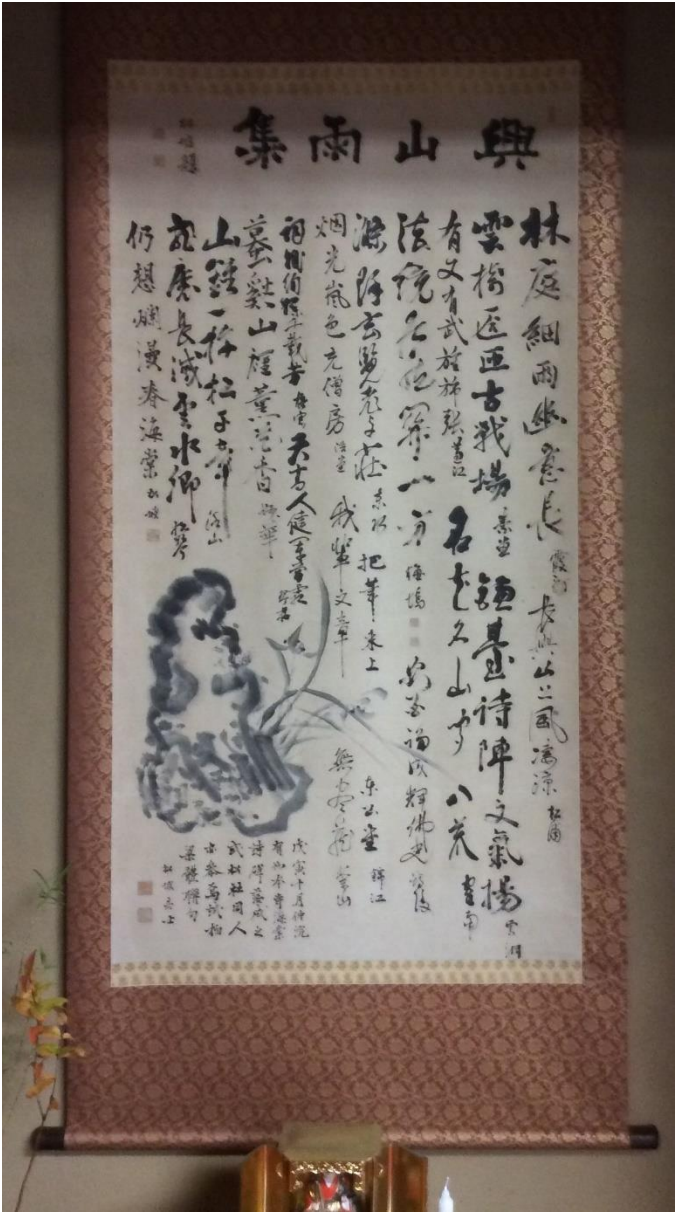
松坡居士

戊寅十月仲浣、妙本寺海棠詩碑の落成式有り。松社同人亦た參ず。

柏梁体の聯句を試む 松坡居士

この聯句が記された詩軸が妙本寺にある





「興山雨集」聯句詩軸 妙本寺藏



「海棠花下吟」詩碑 妙本寺

③ 鶴岡八幡宮

a. 鎌倉市雪ノ下に鎮座。祭神は応神天皇、比売神、神功皇后の三座を祀る。康平六(1063)年、源頼義は鎌倉由比郷に石清水八幡宮を勧請(現在の末社由比若宮)し、治承四(1180)年、源頼朝は東国に挙兵し鎌倉に入ると、社を小林郷北山の現社地に遷し、都市鎌倉の中心に据えた。以後八幡宮は、源氏の氏神、幕府の守護社として鎌倉御家人らの精神的支柱とされ、幕府の公的行事の場となった。鎌倉幕府の発展に伴って機構が整備され、別当、二十五坊の供僧などが置かれた。「鶴岡八幡宮寺」とも称されているように、神仏習合の典型である宮寺形式の神社であり、神主に大伴氏が補せられていたものの、社内の権限は僧侶が握っていた。

建久二(1191)年、社殿を焼失したため、裏山の中腹を切り開いて本社(上宮)を造営、山下の若宮(下宮)、撰末社も整い、面目を一新した。若宮回廊における静御前の舞、社頭にて別当公暁に三代將軍源実朝が殺された事件は有名。歴代將軍家の崇敬厚く、鎌倉幕府滅亡後も、室町幕府の鎌倉府の足利公方、戦国期の後北条氏と、その信仰に怠りなく、北条氏綱、豊臣秀吉らによって社殿の造営や修理が行われるなど、武士の尊崇を集めた。近年、そのときの遺構が発掘されている。明治の神仏分離によって打撃を受け、一時疲弊したが、第二次世界大戦後とくに昭和四十年代の初詣で人口の増大にのって、八年間初詣で日本一を記録した。社宝には籬菊螺鈿蒔絵硯箱、正恒銘太刀(いずれも国宝)などがある。県文化財の桃山期神輿三基の渡御する例大祭は九月十五日、流鏝馬神事は九月十六日。

b. 「新年雑詠」其二

近貨蝸盧且適宜	近くは蝸盧を賃り	且く宜に適い
衡門斜對鶴陵祠	衡門 斜めに鶴陵祠に対す	
曳筇幽逕訪殘碣	幽逕に筇を曳き	殘碣を訪い
曝背小軒緡古詩	背を小軒に曝し	古詩を緡く
豈収孤高誇世俗	豈に孤高を収め	世俗に誇り
祗應迂拙了生涯	祗だ応に迂拙に	生涯を了えんや
新年更喜晴連日	新年 更に喜ぶは	連日晴れ
探遍梅花竹外枝	梅花を探遍す	竹外の枝

『新文学』第五卷第五号 明治四十二(1910)年一月

この詩が詠まれた時の松坡の住まいは不詳(現、i2a 鎌倉付近? 寿福寺付近?)

c. 『鎌倉風景十二帖』(大橋康邦画、田辺松坡詩 昭和八 1933 年冬 逗子開成学園蔵)

其一「鶴岡」詩

廟樓金碧儼神威	廟樓金碧 神威儼かなり
山色氤氳霸業非	山色氤氳として 霸業に非ず
細雨毛空春稍半	細雨毛空 春稍く半ばなり
劫餘楊柳翠依依	劫余の楊柳 翠 依依たり

d. 「鎌倉十二景圖卷」の献納

昭和十（1935）年七月、大橋康邦画、田辺松坡詩并跋、南次郎題の「鎌倉十二景圖卷」（二巻）が鶴岡八幡宮に献納された

鎌倉市中央図書館に献納の折に撮影されたと思われる記念写真がある  
（写っているのは、大橋康邦、田辺松坡、南次郎、八幡宮宮司）

当時、康邦・松坡・南は鎌倉同人会会員だった  
献納された図巻は現在鶴岡八幡宮が所蔵している

e. 雪洞祭りへの詩の奉納

昭和十二（1938）年 第一回

神域森巖紫翠堆 神域森巖として 紫翠堆（ウズタカ）し

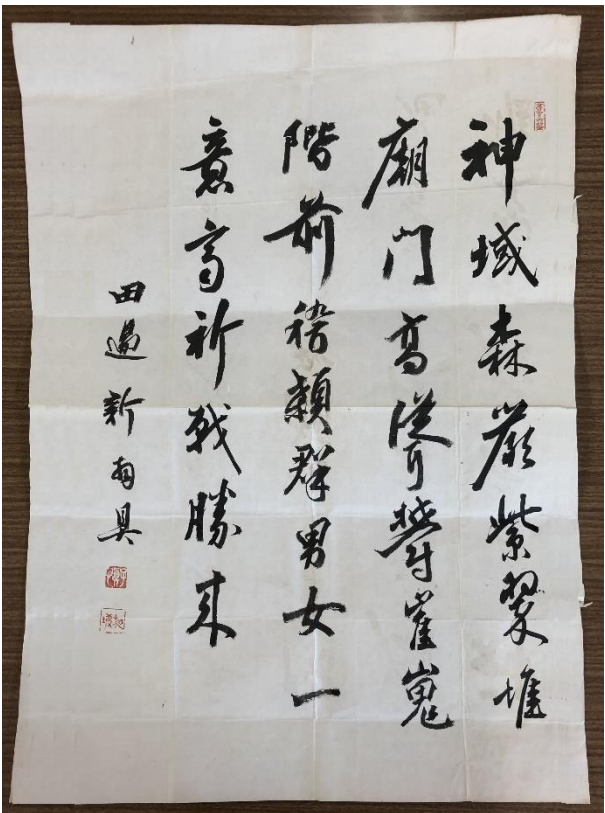
廟門高聳鬱崖崑 廟門高く聳え 鬱崖崑（カイ）たり

階前稽顙群男女 階前に稽顙（ケイソウ）す 群男女

一意齋祈戦勝来 一意に齋祈す 戦勝の来たらんことを

田邊新 拜具

以後、昭和十四、十五、十六、十八年にも奉納（いずれも漢詩）  
松坡の次男至も戦後十回、十五点の画を奉納



雪洞祭り奉納詩（稿）

（鎌倉市中央図書館蔵）

④ その他

a. 円覚寺 釈宗演との親交

詩を贈っている

角田翁頌徳碑（大正三 1914年十二月 玉繩小学校内）

釈宗演の撰文・題で松坡の書

雲関和尚との親交 後に、雲関和尚が住した沼津大中寺を訪ね、詩を詠じている 同寺に詩軸が多数伝来  
帰源院で松社の詩会

b. 建長寺

釈宗演との親交

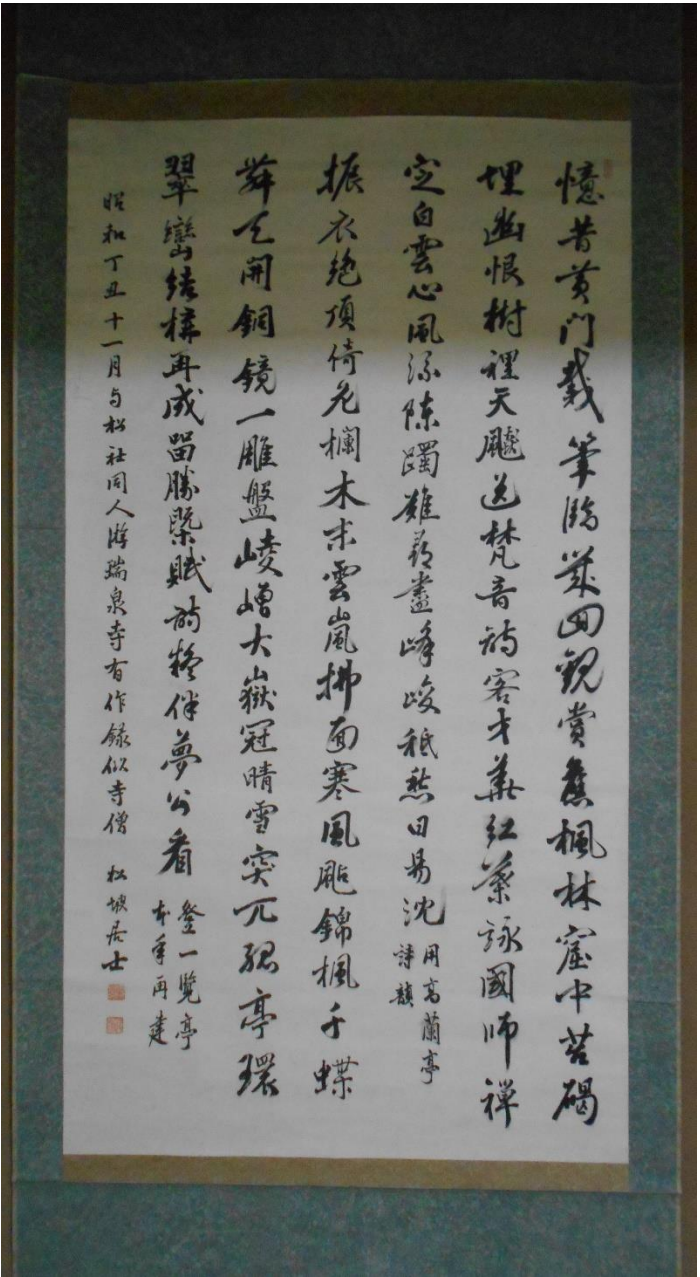
國立正呉との親交 漢詩講義（C. ① 参照）

c. 瑞泉寺

松堂和尚との親交

瑞泉寺を詠じた作がある

徧界一覽亭の再建（昭和十 1935年、昭和十一 1937年）に際し、松社の月例会を催す その際に松坡が詠じた詩（七言律詩一首）が詩軸に仕立てられて、松堂和尚に贈られた 現在、瑞泉寺が所蔵



d. 英勝寺 松社の詩会がしばしば開かれている

e. 大巧寺 片野玄貞との親交 玄貞没後、『晃陽詩鈔』を松坡が編む

f. 光則寺 横山仁秀との親交

g. 鎌倉宮 鎌倉宮を詠じた作あり

鎌倉宮碑建立に尽力

巖谷一六撰、松方正義書